

コミュニケーション障がい者にもわかりやすい 展示解説技術の開発

身近な人の中にも、知的障がいや自閉症、失語症や認知症といった理由で他者とコミュニケーションを取ることが困難な人がいます。そのような人をネガティブに捉えるのではなく、「さまざまな才能を持つ人」と認める工夫があれば、社会は今よりも生きやすくなるでしょう。それにしてもコミュニケーション障がい者が生きやすい社会とはどのようなものでしょうか。博物館のような生涯学習施設でなら、それを試してみることができそうです。この計画は、そのような社会実験を博物館の展示解説に当てはめ、誰にでもわかりやすい展示解説技術を探そうという試みです。

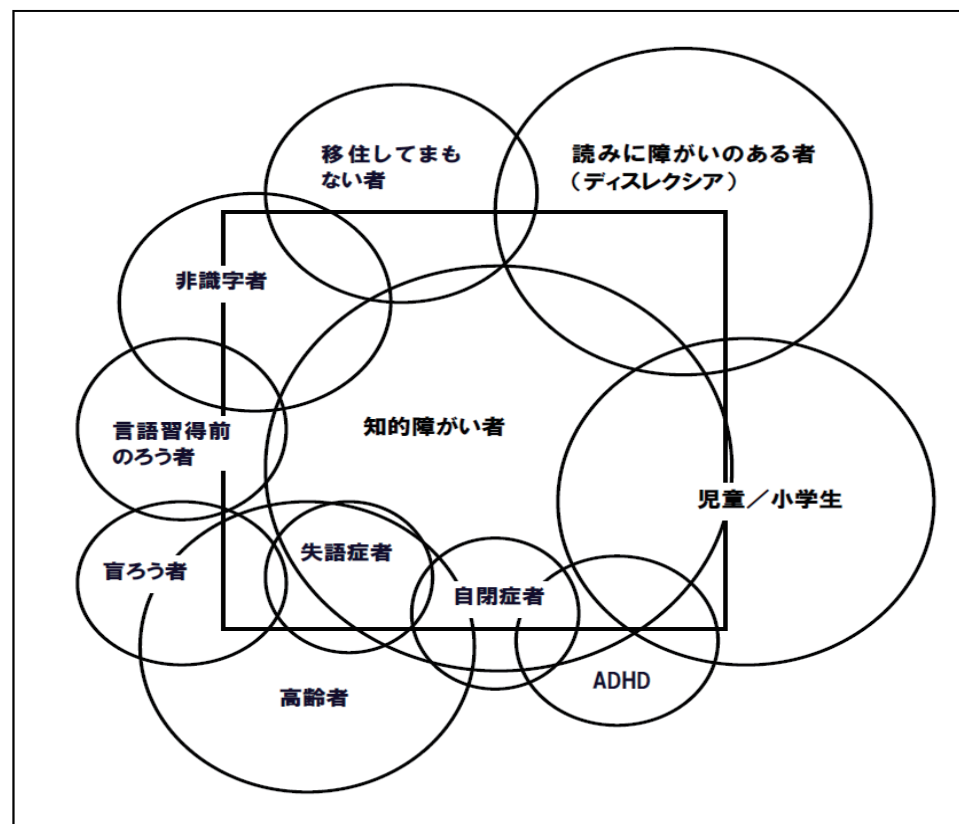
DAISYというのは音声といっしょに写真や絵などの視覚情報と文字が表れる表示スタイルです。もともとは視覚障がい者にわかりやすい文書スタイルとして開発されたものですが、その後、マルチメディアDAISYとして視覚情報を統合するスタイルが開発され、さまざまな障がい者に役立つことがわかりました。

国際図書館連盟(IFLA)では障がい者を対象にした文章表現法を積極的に提案していますが、対象者の中に、障がい者と共に幼児や児童・生徒、高齢者、そして文字を学んだことのない非識字者や移住して間もない母語が異なる人に対する工夫も提案しています。生涯学習施設というのは、さまざまな人を対象に学習する機会

を提供し、情報のアクセシビリティ権を保障する使命があります。誰にでもわかりやすい展示解説技術の開発は、障がい者ばかりでなく多くの人に充実した学習機会をもたらします。そのような学習機会が、やがては社会全体に実現されることを願って、わかりやすい展示解説技術の開発を行っているのです。

「読みやすい図書」の対象となる人びと。円がだいたい対象グループを表し、四角形は読みやすい図書のニーズを示している。円に重なりがあるのは、障害が重複していることを示す。この図では障がいのある人と「移住してまもない者」や「非識字者」がいっしょに描かれている。ADHDは注意欠陥多動障がいのことで、日本では発達障がいとして扱われている。トロンバッケ(編)(1997)を改変の上、引用。三谷(2013)

[http://www.hitohaku.jp/publication/r-bulletin/No24_04.pdf]を参照のこと。



DAISYを応用したコミュニケーション障がい者にもわかりやすい展示解説技術の開発

代表者：三谷雅純

財源：科研費・その他の民間研究費